

Title	北安曇郡郷土誌稿 第四輯(俗信俚諺篇)(信濃教育會北安曇部會編, 郷土研究社發行) / 天草島民俗誌(濱田隆一著, 郷土研究社發行)
Sub Title	
Author	有賀, 春雄(Ariga, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.1 (1933. 4) ,p.164- 165
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330400-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を區別し、さうして國家的見地から後者に對し特別の取扱をせねばならぬとするのである。誠に暗示多き所論であるけれども、しかし實際において神社が崇拜の對象となる場合にはその祭神が如何に民族的性質のものであつても、全く個人的動機を失ふことはできないであらうし、また宗教的神社と民族的神社との區別が果して徹底的に明確になし得らるかどうか、もしできたとしても民族的神社が却つて一般民衆の心から離れてゆきはしないであらうか。もし神社が單に國民道德の對象にとどまるものならば、神社の形式が時代とともに變化してもいいわけであらう。がとにかく神社對宗教は我國に於ける重要問題の一であり、これに對してなされた松岡氏の新提案は國民のひとしく深思せねばならぬのである。(松本芳夫)

系譜精表

(佐藤小吉著)
東洋圖書株式會社發行

「歴史を續くにあたつて系譜及び年表、地圖の必要なことは言ふまでもない。……然るに年表及び讀史地圖の手頃のものは乏しくないが、獨最も必要な系譜の未だ坐右に備ふるものはないのは甚だ遺憾なことである」といふ趣旨から、著者が多年の經驗に基いて、主として高等専門諸學校の國史參考書として本書を公刊されたのである。その内容は第一神代御系譜、第二歴代天皇御系譜、第三皇族御系譜、第四諸家系譜、第五佛教諸宗派系、第六繪畫諸派系(附茶道、猿樂、佛工、香道諸派系)、第七朝鮮歴代系、第八公家、大名表、及び索引から成り、その表記法にいろいろ苦心の

跡がうかがはれ、參考書として誠に重寶である。吾々が讀史に際して常に苦む一つのことは人名の讀方である。本書においてはむつかしい人名にまゝ振假名を附せられてゐるのは有難いが、この親切をもつとひろく及ぼしてもらひたく、また著名な人物の母の表記もねがはしいものである。従來系譜においては母系はほとんど無視されたのであるけれども、新時代の系譜としてはかういふ點も考慮されていいと思ふ。尤も本書においては婚嫁の表記があるから、女の實家の系譜において知りうる場合はあるけれども、婚家の系譜においても註記されれば一層便利である。(松本芳夫)

北安曇郡郷土誌稿

第四輯(俗信俚諺篇)

(信濃教育會北安曇郡會編郷土研究社發行)

天草島民俗誌

(濱田隆一著郷土研究社發行)

この兩書は共に最近郷土研究社から發行されたものである。前者は長野縣北安曇地方の俗信俚諺集であつて、収録されたもの、總て四千六百、これが十五種類に分類されてゐる。分類に際して編纂者は渺なからず頭を悩まされたようであるが、若しこれ以上の分類を要求する者があるとすれば、要求する方が間違つてゐる。要は、捨て置けばもう近い將來に湮滅すべき口碑を、一刻も早く記録固定することであつて、その場合、分類は便宜に従ふ程度で差支ないと思ふ。これが整理や解釋や利用は更に次の問題とすべきである。吾人は此の種の努力が全國各地の郷土研究者によつて速かに遂行せられん事を希望する。而してその場合、必らず

や本書が一つの指針となるべきことを確信するものである。巻頭に掲げられた柳田國男先生の序文「俚諺と俗信との關係」は、此の方面の學問に關心を有する者の一讀すべき文字である。

次に濱田氏の天草島民俗誌は、郷土研究社諸國叢書第一篇として出されたものであつて、同じく民間傳承の固定されたものとして貴重である。内容は主として該地方の行事と口碑傳説とであり、口碑傳説は河童に關するものと、木石有情談として一括されたものを收めてゐる。このうち河童に關する説話の意外に多いことは、それ自身一つのフォークロアの問題であらう。卷末に「天草と琉球」及び「天草の痘瘡神信仰」の二篇が收められてゐるが、共に興味ある考察であつて、殊に後者に於ける痘瘡治療の神としての鹿と猿との信仰に關する解説は、著者の創見によつて教へられる所が頗る多い。(北安曇郷土誌稿—定價一・五〇、天草島民俗誌—定價一・八〇)(有賀春雄)

東洋史上 日本上古史研究一 (邪馬臺) (橋本増吉著)
より觀たる

日本上古史を研究するに、年代順から云ふと記紀より先きに先づ支那史書に現はれたる日本に關する記事、殊に魏志倭人傳の研究が必要であることは云ふまでもない。從來菅政友、那珂通世、内藤虎次郎、白鳥庫吉等の諸氏によつてその考證が公けにせられてゐるが、近時考古學其他の諸科學の研究の擡頭に伴ひ、倭人傳の解釋にも大分新説が發表せられ、加ふるに支那文獻そのものに

も新しき材料の増加あり、之を集大成して、比較考究し、我古代日本の偽れざる形相を正確に認識せんとすることは吾人にとつて必要缺くべからざる要件である。魏志倭人傳の解釋の中殊に問題多きは邪馬臺國の位置を九州とするか大和にするかの點であり、明治四十三年白鳥博士の九州説に對し、内藤博士の大和説が出で、論戰は、はなばなしく展開されたが、其後高橋健目、梅原末治氏等考古學者の大和説を主張するもの多く、之に對し九州論者また激烈に辯駁し、その論戰は、實に學界の一大偉業であつた。我橋本教授は、その論戰の初頭即ち明治四十三年十月に既に「邪馬臺國及び卑彌呼に就て」なる一文に於て敢然兩博士の説に駁撃を加へ、九州説に立脚しつゝ自説を提唱し、此問題の指導的論者として斯界に重きをなしたが、考古學者の大和説の起るや、また九州説の擁護者として考古學者の意見の尙早を論じ、その引證の該博なる、考證の綿密適確なる、依然として邪馬臺問題の第一人者たる貫祿を示された。同氏が、此問題に關して本誌を初め、史學雜誌、考古學雜誌、其他の諸雜誌に發表せられし諸論文を一括し、此處に標題の如き尙大なる著書を公刊されることになつたのは、邪馬臺問題論争史の一時期を劃する事件として斯界の爲祝福しなればならぬ。その第一卷たる本篇は、教授が本誌に昭和二年より昭和六年に至るまで連載されし「支那史料に現はれたる我が上代なる長編を改訂増補し、全くその面目を一新させて世に問ふたものであり、云ふまでもなく本邦に於ける魏志倭人傳研究の集大成であり、大和論者であれ九州論者であれ今後此問題研究者のよつてもつて準據となすべき一大指導標である。